授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2518 号

Long-term outcomes of postgastrectomy syndrome after total laparoscopic distal gastrectomy using the augmented rectangle technique

ART を用いた腹腔鏡下幽門側胃切除における胃切除後症候群の長期成績

山内　卓（やまうち　すぐる）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除術後 Billroth Ⅰ 再建手法である Augmented Rectangle Technique（ART）が、胃切除後症候群と QOL に有益な長期結果をもたらすことを初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である。胃切除後症候群は胃切除により生理的な役割が減弱または欠如するために起こる医原性の病態であり、手術による生体機能の変化に対する適応障害ともいえ、患者の QOL を低下させる臨床上重要な問題である。2013 年に独自開発された ART はその良好な短期成績が報告されているが、その長期成績への影響、特に胃切除後症候群と QOL への影響については明らかではないため本研究が実施された。PGSAS-37 質問票を用いて、PGSAS による全国多施設共同横断研究で示された他施設での幽門側胃切除後 Billroth Ⅰ再建症例と比較した。ART 群(94 症例)と PGSAS 群(909 症例)の解析により、胃切除後症候群の指標である症状サブスケール（食道逆流、腹痛、食事関連愁訴、消化不良、下痢、便秘、ダンピング)、全体症状スコア（1.6 ± 0.4 vs 2.0 ± 0.7、P < 0.001)が ART 群で有意に良好であり、QOL カテゴリーである症状、食事、仕事不満度のスコアについても ART 群が優れていたことが明らかとなった。本研究では、独自に開発した再建方法が長期的な胃切除後症候群、QOL に与える影響を客観的に評価し、その有用性が明らかとなった。この結果は胃切除を必要とする胃癌患者に有益な報告である。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。